様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３８０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３５０７９７

研究課題名（和文）東日本大震災で被災した地域スポーツ界の復興要因に関する社会学的研究

研究課題名（英文）Sociological Study of the Revival Factors of the Community Sports World Damaged in the Great East Japan Earthquake

研究代表者
吉田　毅（YOSHIDA, Takeshi）

常葉大学・健康プロデュース学部・教授

研究者番号：７０２１０６９８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、東日本大震災で被災した地域スポーツ界が復興していくプロセスにおける促進要因と阻害要因について社会学的視座から解明することであった。調査対象は、津波で甚大な被害を受けた宮城県七ヶ浜町の某総合型地域スポーツクラブと、単一種目型の子どもスポーツクラブ（スポーツ少年団）及び成人スポーツクラブ2つずつ、それに各クラブのメンバーであった。促進要因として見出されたのは、子どもスポーツクラブでは指導者（成人）の子ども愛、地域愛、クラブ愛等、成人スポーツクラブではメンバーのスポーツ欲求等であった。阻害要因としては、各クラブにとって重要な活動場所の復旧の遅れが見出された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to identify the promotional factors and the preventive factors of the revival of the community sports world damaged in the Great East Japan Earthquake from the sociological viewpoint. The subjects of the research were an integrated community sports club, two junior sports clubs, two adult sports clubs, and the members of each club in Shichigahama town of Miyagi prefecture greatly damaged by tsunami. The main promotional factors were as follows: First, in the junior sports clubs, they were the loves of the coaches(adults) for the child members, the community, and the club, and so on. In the adult sports clubs, they were the desires of the members for sport activity, and so on. Furthermore, the preventive factors were the delays of the revival of the important grounds for each club.

研究分野：スポーツ社会学

キーワード：東日本大震災　地域スポーツクラブ　復興要因　子ども愛　地域愛　クラブ愛　スポーツ欲求　活動場所の復旧

１．研究開始当初の背景

東日本大震災（以下「大震災」）発生から２年半あまり、被災地（者）の復興のために各方面から夥しい支援が続けられてきた。メディア等が盛んに言及してきたスポーツの力も、ほとんどはそうしたいわば被災地への支援力を指すものであったとみられるが、そもそも被災地ではスポーツ界も甚大な被害を受けたのであり、スポーツ界の復興も重要といえる。被災したスポーツ界が震災に挫けず、それ自体の復興へ向けて進んでいくという意味でのスポーツの力にも留意すべきであるが、スポーツ社会学では大震災発生当初から、この種の力がいかに発揮されているのか（されたのか）、換言すればスポーツ界の復興の様相を捉えようとする動きは鈍かった。

そこで筆者は独自に、この点をめぐってさしずめ高校運動部と障害者スポーツクラブを対象に検討した（吉田 2012）。その結果、各クラブが被災地を離れて復興へ向かう様相が捉えられたが、スポーツ界の復興の全容を解明するには、むろんそうした個別的なクラブに留まらず他の諸事例をも対象に研究を蓄積していく必要がある。それにあたり、甚大な被害を受け最も苦境に立たされた被災地、その住民を主たるメンバーとし、そこを拠点とし続ける「地域スポーツ界」に着目することは不可欠であろう。

地域スポーツ界の主要な活動単位は子どもや成人の地域スポーツクラブとみられるが、筆者が行った某被災地での聞き取りによると、そこにおける各地域スポーツクラブの復興には進度の違いがあり復興を阻まれているクラブもあること、そうした復興の進度は、当該地域スポーツ界における各クラブ間の関係性等の震災前からの様子による面があることなどが分かった。このことから、被災した地域スポーツ界の復興要因を捉えるには、促進要因のみならず阻害要因にも留意すべきこと、また、震災後だけではなく震災前の様子にも留意すべきことが示唆される。

２．研究の目的

（１）目的

本研究の目的は、大震災で被災した「地域スポーツ界」が復興していく際の促進要因と阻害要因について社会学的視座から解明し、それを基に大震災からの地域スポーツ界の復興及び防災・減災の要点について示すことである。主な検討課題は下記の通りである。ここでは地域スポーツ界として、同一自治体（町内）における総合型地域スポーツクラブと、単一種目型の子どもスポーツクラブ及び成人スポーツクラブ、それに各クラブのメンバーを対象とし、当該地域スポーツ界の震災前からの様子に留意し上記要因について検討する。その上で、大震災からの地域スポーツ界の復興及び防災・減災の要点について考察する。

①子どもスポーツクラブの復興要因
②成人スポーツクラブの復興要因
③クラブメンバーの復興要因とクラブ活動との関係性
④大震災からの地域スポーツ界の復興及び防災・減災の要点

（２）特色・独創性

１）「震災復興とスポーツ」に関する着眼点の独創性と実践的意義
２）「地域スポーツ」に関する研究の面①：地域スポーツを包括的に捉える
３）「地域スポーツ」に関する研究の面②：地域スポーツ界の震災前の様子も捉える
４）「スポーツ集団」に関する研究の面：スポーツ集団のダイナミズムを捉える
５）「スポーツ界における困難克服」に関する研究の面：研究射程の拡大

３．研究の方法

本研究はフィールドワークの方法（主にインタビュー法）を用いる。調査対象は、被災県で最も人的被害が大きかった宮城県の沿岸部に位置し、特に津波で甚大な被害を受けた七ヶ浜町の総合型地域スポーツクラブ（以下「総合型」）と、単一種目型のスポーツ少年団（以下「スポ少」）及び成人スポーツクラブ（以下「成人クラブ」）である。各クラブの復興の現状を観察によって確認するとともに、各クラブの震災前と被災の様子及び復興要因について関係者へのインタビュー調査により解明する。はじめに総合型の子ども部門とスポ少を、次に総合型の成人部門と成人クラブを対象とする。さらに、各クラブに所属する（した）被災したメンバーの復興要因について、特にクラブ活動との関係性に留意し、メンバー個々へのインタビュー調査により解明する。こうした手続きで得られた知見を基に、大震災からの地域スポーツ界の復興及び防災・減災の要点について考察する。各年度については次の通りである。

＜平成 26 年度＞

総合型の子ども部門とスポ少を対象に「研究目的①」の検討を行う。

＜平成 27 年度＞

総合型の成人部門と成人クラブを対象に「研究目的②」の検討を行う。

＜平成 28 年度＞

「研究目的③及び④」の検討を行う。前年度までに対象とした各クラブに所属する（した）被災したメンバーの復興要因について、特に復興にクラブ活動がいかに機能したかに留意し探っていく。また、上記①から③で得られた知見を基に、大震災からの地域スポーツ界の復興及び防災・減災の要点について総合的に考察する。

４．研究成果

調査の結果、対象とするクラブ及びメンバーの復興の程度に差異が認められた。そのた

めここでは、あくまで各々の調査時点までの復興の様子に着目するに留まる。また、調査を進めていくと、総合型の場合は子ども部門と成人部門とが連動して復興へ向かう様子が捉えられた。それについては既に下記論文を著したので参照されたい（紙幅の都合により割愛せざるを得ない）。ここではまず、研究目的①に関わるスポ少の知見を示す。次に、研究目的②に関わる成人クラブの知見を示し、さらに研究目的③に関わる知見を示す。研究目的④については、より時間をかけて検討を重ね、稿を改めて論ずることにするが、研究目的③までの知見からある程度は読み取ることが可能であろう。なお、各節では対象をアルファベット表記とする。複数の節で同じアルファベットが用いられていても、それらは基本的に同じ対象というわけではないことを断っておく。上記論文は次の通りである。

【吉田　毅（2016）、東日本大震災で被災した総合型地域スポーツクラブのレジリエンスに関する社会学的研究―地域スポーツ論への一視角―、体育の科学、66 巻 7 号、杏林書院】

（１）スポ少の復興要因

調査対象は野球スポ少Ｙクラブ（以下「Ｙクラブ」）とサッカースポ少Ｓクラブ（以下「Ｓクラブ」）である。インタビューは各クラブの指導者、Ｙクラブでは団長Ｉ氏（60 代）と監督Ａ氏（50 代）、Ｓクラブでは総監督M氏（50 代）とヘッドコーチW氏（30 代）を対象に、各々に対し数回ずつ行った。大震災当事、Ｉ氏は大型トラック運転手、Ａ氏とM氏は七ヶ浜町役場職員、W氏は漁業協同組合職員であった。いずれも長年に亘って各クラブの指導に携わってきた同町生え抜きの人物である。大震災ではＩ氏とＡ氏は甚大な被害を免れたが、M氏とW氏は自宅が全壊し、さらにM氏は母を亡くした。次に、紙幅の都合によりＳクラブの被災前から被災後までの様子のみ示し、両クラブの復興要因を端的に述べる。

＜Ｓクラブについて＞

Ｓクラブは県内におけるサッカースポ少の草創期というべき 1971 年、七ヶ浜町の 2 つの小学校児童を対象に設立された。設立翌年には県大会で優勝し、全国大会出場を果たした。活動場所は主に、照明を備えた町営第 1 スポーツ広場（以下「第 1 広場」）であり、基本的に火曜、水曜、金曜に練習、休日に試合ないし練習を行っていた。M氏が活動全体の指揮を執り、W氏らコーチ数人が児童の指導に当たる。第 1 広場は、W氏が「最高の場」「自分達の家のように整備してきれいにしてきた」というように、Ｓクラブにとってかけがえのない活動場所となっていた。また、Ｙクラブと同様に親の会も積極的に活動を支えている。

総監督M氏は全国大会出場時の主力であり、高校でも強豪チームのレギュラーとして全国大会に出場した。高校卒業後はＳクラブと連携する成人クラブでプレーを続ける中、Ｓクラブで子どもの指導にも携わるようになった。W氏はM氏の教え子であり、高校時代にM氏に誘われてＳクラブの指導に携わるようになった。

大震災当時、メンバー（3 年生以上）は卒団した 6 年生を除き 50 人程であった。前述のようにM氏は津波で自宅ばかりか母をも失った。Ｓクラブの活動を撮影した多くのビデオテープも流失した。W氏とメンバー数人は自宅が被害に遭い、W氏の場合は職場の被害も甚大であった。祖父を亡くしたメンバーもいた。M氏は家族と 4 月初旬まで内陸部にある妻の実家に、その後は姉の家に避難し、5 月中旬にはみなし仮設に移った。大震災直後は１ヶ月あまり、業務で避難所運営に当たり役場に寝泊りする日々を送った。W氏も家族と１ヶ月程母親の実家に避難した後、自宅の修繕が終わるまでは１年程みなし仮設で過ごした。他方、第１広場は仮設住宅用地となり、Ｓクラブは活動場所を失った。

M氏は「学校再開までは自粛ムードが町に漂っていたので活動再開は控えた」という。自身も「正直なところ 4 月下旬頃までサッカーどころじゃなかった」。W氏はM氏の被害状況を知っていたため「自分から連絡するのは控えた」というが、M氏は一方で「このままクラブの火を消すことはできない･･･自分もここで育ててもらったし、いろんなことを学ぶことができた。伝統を絶やすことはできない」との思いもあった。「公園で子どもがボールを蹴っているのを見ること」もあった。「子どもは明るかった」という。父兄から活動再開の要請があったわけではないが、「子どもに震災は関係ない、サッカーをやらせてあげたい」との思いが次第に湧いてきた。W氏も避難先で子どもが楽しそうに動き回っている姿を見て、M氏と同じことを考えていたという。

4 月下旬頃には「自粛ムードも弱まり」、M氏はＳクラブの活動場所を探し始めた。間もなく近隣のフットサルコートを手配することができた。平日の移動にはＳクラブが保有するバスを用いることにした。W氏が大型の運転免許を有していたことにもよる。バスに乗車できる人数の関係で、まずは上級生だけ再開することにした。5 月初旬に父兄に連絡すると、皆が活動再開を望んでいたという。連休明けに活動を再開した。「子どもは活き活きしていた･･･やっぱりサッカーが好きなんだな･･･清々しい感じでそこからエネルギーをもらった」とM氏はいう。

その後も数回、同じフットサルコートで練習した。交流のあった近隣のスポ少の配慮で合同練習の機会も得た。下級生も移動が可能な際は参加した。やがて町営野球場も使える

ようになったが、活動場所の問題はずっと続いた。そんな中、相次ぐサッカー用具等の物資支援は「皆の励みになった」。夏になると第 2 スポーツ広場が使用可能となったが、凹凸が激しかった。軟弱で水はけも悪く「練習にならなかった…子どもは集中できなかった」という。M氏は活動を充実させねばと手を尽くした。Ｓクラブ関係者で整地に努め、また仮設の照明も設置した。それでも決して第 1 広場のようにはならなかったが、その後も環境整備を進め何とか活動を軌道に乗せることができたという。

大震災から 2 年半あまり経つと、人工芝の町営フットサルコートが完成した。その後も火曜だけは第 2 スポーツ広場しか使えない状況が続いたが、それ以外は真新しいフットサルコートで練習することができた。そこでは練習もはかどり「子どものやる気が全然違った」とW氏はいう。漸く復興の途についたのであるが、W氏は「復旧度は 70 パーセント･･･真の復興は第 1 広場に戻れた時だと思う」という。

＜両クラブの復興要因＞

両クラブとも、活動を再開するには指導者（成人）の存在が不可欠であった。もとよりスポ少の活動は子どもだけでは成立しないため、こうした点は震災復興に限るわけではない。では、両クラブの指導者を活動再開へとおし進めたのは何であったか。Ｙクラブにおいては A 氏らの子どもや地域への思い、いわば子ども愛と地域愛が、Ｓクラブにおいては M 氏らの子ども愛とクラブ愛が挙げられる。何よりもそうした心情が、各クラブの活動再開とその後の復興プロセスにおける促進要因とみられる。また、両クラブとも曲がりなりにも活動場所を確保できたことも促進要因として挙げられる。

ただし両クラブとも、大震災から 3 年以上が過ぎても復興を遂げたとはいえまい。Ｙクラブの場合は卒団生が進む中学校の校庭に、Ｓクラブの場合は主な活動場所であった第 1 広場に仮設住宅が建ち、状況的な差異はあれども復興の妨げとなっていた。両クラブの復興の阻害要因としては、各クラブにとって重要な活動場所の復旧の遅れが挙げられる。その原因となる仮設住宅の問題はむろんやむを得ないものであるが、両者が復興を遂げるには上記の活動場所が復旧することが必要といえよう。

（２）成人クラブの復興要因

調査対象は男子サッカークラブ（以下「Ｔクラブ」）と女子バレーボールクラブ（以下「Ｌクラブ」）である。Ｔクラブは前述したＳクラブの兄貴分的な存在である（同じサッカークラブの子ども部門と成人部門）。インタビューは各クラブの再開とその後の様子に詳しいとみられる人物に対し数回ずつ行った。Ｔクラブについては、Ｓクラブの総監督でもある監督M氏（50 代）、主将Ｉ氏（30 代）、主務D氏（30 代）、ＬクラブについてはメンバーＹ氏（30 代）、K氏（20 代）、さらに男子バレーボールクラブ（以下「男子クラブ」）のリーダーH氏（50 代）、Ｌクラブの先輩格Ｎクラブのリーダー U 氏（70 代）である。大震災当時、Ｉ氏は漁業協同組合職員、D氏は自営業（のり加工販売）、Ｙ氏とK氏はパート、H氏は海産物行商人であった。M氏、Ｉ氏、H氏は自宅が津波で全壊した。Ｉ氏は職場も被害に遭った。他の人物はさして被害がなかった。次に、紙幅の都合によりＬクラブの被災前から被災後までの様子のみ示し、両クラブの復興要因を端的に述べる。

＜Ｌクラブについて＞

Ｌクラブはバレーボール家庭婦人 9 人制のクラブとして 1985 年、七ヶ浜町のＰＴＡ有志により結成された。土曜の午後に中央公民館で練習や試合を行い、大会があれば休日も活動していた。目標は近隣市町の大会で上位に入ることであった。このカテゴリーは本来、25 歳以上の既婚者を対象とするが、Ｌクラブでは徐々にメンバー不足が進み、20 代前半の独身者の加入も認めるに至った。それと同時に大会の主催側に出場資格の緩和を求め、当初は難色を示されたものの、他にも人数不足に直面するクラブが出始めたことで主催側が折れた。設立当初よりＬクラブのメンバーは 10 人程であった。練習で全員が揃うことはあまりなかったが、Ｙ氏とK氏はかつてよりＬクラブの活動だけでは満足できず、火曜と木曜の夜にH氏を中心にＯ中学校体育館で行われる男子クラブの練習にも参加していた。隣のコートではＮクラブが練習していたが、H氏が「昔から七ヶ浜のバレー界はバリアがない･･･何かあれば協力しあえる雰囲気だった」と語るように、皆で一緒に試合や練習を行うことも少なくなかった。

大震災ではメンバーに人的被害はなかったが、Ｌクラブを設立当初からリードしてきた主将、他のメンバー2 人、さらにH氏は自宅が津波被害に遭った。一部損壊した中央公民館は当初は避難所とされ、その後は支援物資置き場とされた。むろんＬクラブの活動は休止した。Ｙ氏は「子どもや家のことで精一杯」であった。K氏は「水汲みや生活のことだけで大変」であり、「バレーはしたい」が「スポーツどころではない雰囲気…バレーができるとは思えなかった」という。暫くはメンバー間で連絡を取り合う余裕もなかった。

町内に落ち着きが戻ってきた 4 月中旬頃、K氏は「そろそろバレーをやっても大丈夫では」と思いH氏に電話した。相前後してＹ氏も「バレーがしたい」し「皆と会いたい」と思いH氏に電話した。両者とも「ずっと世話になっていた」という「おんちゃん（H氏の俗称）」が頼りであった。

H氏は避難所暮らしを続けながら、自宅等

の片付けのため多忙な日々を送っていたが、K氏とY氏から電話を受けたことで活動再開を考えるようになった。「片付けで身体を動かしてはいた」が「鈍った感じがあった」ため、自身もその頃は「伸び伸び運動したい」と思うようになっていた。幸いクラブのボールは自宅倉庫の上の棚に保管していたため無事であった。H氏はO中学校体育館の様子をNクラブのメンバーに尋ねると、間もなくそこでNクラブが活動を再開するとの情報を得た。早速それをK氏とY氏に伝えた。

Nクラブは 1970 年代に幼稚園児の母達で結成された、Lクラブよりずっと平均年齢が高いクラブである（メンバーのほとんどは 60 代）。ずっとO中学校体育館で活動を続け、県内で開催される様々な大会にも出場してきた。大震災では 1 人の自宅が半壊した程度に留まった。比較的被害が小さかったこともあり、町内の他のバレーボールクラブよりも活動再開は早かった。最年長のU氏は、町内のライフラインが復旧し、小中学校で新学期の授業が始まった 4 月中旬には「バレーを再開したいと思って（主将と）電話で話をした」という。5 月中旬になるとメンバーで食事会を開いた。ほとんどが参加し、早く活動を再開することを皆で決めたという。その 3 日後（火曜）には上記体育館が使用可能であったことから急遽、活動を再開するに至った。H氏をはじめK氏、Y氏が加わったのはその 2 日後、再開して 2 回目の活動の際であった。H氏に加え男子クラブの他のメンバー2 人も参加した。この 5 人はその後も、大震災前と同様に活動を続けた。

K氏とY氏は活動を続ける中で、Lクラブの甚大な被害に遭ったメンバーに時々連絡をとった。励ましたり活動に誘ったりしたが、彼女達はなかなか参加する余裕がなかったという。Lクラブとしての活動再開は、彼女達も参加できるようになった 7 月下旬頃であった。Lクラブはその後もNクラブと男子クラブの協力を得、木曜の夜に一緒に活動することができた。主将は津波被害を受けたショックで参加できない日もあったが、メンバーの支えもあって徐々に回復していったという。翌年春には、高齢化するNクラブが活動場所を隣町の体育館に変えて日中に活動することになり、LクラブがO中学校体育館を単独で使用できるようになった。丁度その頃、大震災後初となる近隣市町の大会が開催されLクラブも出場した。その後もLクラブは、K氏とY氏を中心に木曜の夜に活動を続けている。

＜両クラブの復興要因＞

両クラブとも、震災前から活動をリードしてきた主将が甚大な被害に遭い、主体的に活動再開をおし進めるのは困難となった。そうした中、両クラブの活動再開とその後の復興プロセスにおける促進要因となったのは、被災を免れ活動可能であったメンバーのスポーツ（各種目）欲求であったといえよう。活動をつなげていくメンバーがいなければ、それこそ各クラブともなくなったかもしれない。また、前述したスポ少と同様に、両クラブが曲がりなりにも活動場所を確保できたことも促進要因として挙げられる。この点に関して、Lクラブの場合は大震災前からのクラブ間の関係性も促進要因として看過することはできない。バリアのないクラブ間の関係性が築かれていたのである。これにはK氏とY氏の存在が大きい。彼女らが大震災前から男子クラブやNクラブに交って活動していたことがLクラブの復興に大いに役立ったとみられる。

他方、阻害要因についてみると、Lクラブにおいてはさして見当たらないが、Tクラブにおいては前述したSクラブと同様に、主な活動場所であった第 1 広場の復旧の遅れが挙げられる。

（3）クラブメンバーの復興要因とクラブ活動との関係性

調査対象者は、前述したスポ少ないし成人クラブに所属する（した）被災したメンバー 10 人である。各々の性別、大震災当事の学年（ないし年代）、所属クラブ、家族、それに被害状況は次の通りである。

＜Aさん＞男性、小学 4 年、Yクラブ、7 人家族（祖父母、父母、兄 2 人）、自宅全壊
＜Bさん＞男性、小学 3 年、Yクラブ、5 人家族（祖母、父母、弟）、自宅全壊
＜Cさん＞男性、小学 6 年、Sクラブ、7 人家族（祖父母、父母、弟、妹）、自宅全壊
＜Dさん＞男性、小学 3 年、Sクラブ、8 人家族（曾祖母、祖父母、父母、兄、妹：Eさんの弟）、自宅全壊
＜Eさん＞男性、小学 4 年、Sクラブ、8 人家族（曾祖母、祖父母、父母、弟、妹：Dさんの兄）
＜Fさん＞女性、30 代、Lクラブ、5 人家族（義理の父母、夫、長女）、自宅全壊
＜Gさん＞女性、20 代、Lクラブ、5 人家族（祖母、父母、弟：Hさんの長女）、自宅大規模半壊
＜Hさん＞男性、50 代、男子バレーボールクラブ、5 人家族（母、妻、長女、長男：Gさんの父）、自宅大規模半壊
＜Iさん＞男性、30 代、Tクラブ、6 人家族（祖母、母、妻、長男、長女）、自宅全壊
＜Jさん＞男性、50 代、Tクラブ、6 人家族（母、妻、娘 3 人）、自宅全壊及び母他界

10 人の復興の程度は一様ではない。調査時点で、多くは自宅再建に至っていたが、Bさんの場合は仮設住宅暮らしが続いていた。また、Iさんの場合は自宅再建の目途さえ立っていない状況であった。そのためここでは、各々の調査時点までの復興プロセスにおけるクラブ活動の機能に着目する。結論を先取

りすれば、クラブ活動が多く（ＧさんとＩさん以外）のメンバーの場合は被災による運動不足で蓄積されたストレスの解消に有効であったとみられる。また、神経症的な病状に陥ったＧさんの場合はその回復に、特に被害が甚大であったＩさんの場合は情緒的な癒しに有効であったとみられる。ここでは紙幅の都合により、ストレスの解消に有効であった人物の典型と考えられるＡさんの様子のみ示す。

＜Ａさんについて＞

Ａさんは幼少の頃からプロ野球に憧れを抱いており、小学 2 年時に父の勧めでＹクラブに入った。Ｙクラブは 1975 年、七ヶ浜町のＥ小学校児童を対象に設立された。当初より児童の野球競技力向上と健全育成をモットーとし、礼儀も重んじてきた。大震災以前は県大会で優勝したこともある。活動場所は主にＥ小学校校庭であり、基本的には火曜と木曜に練習、休日に試合ないし練習を行っていた。

ＡさんがＹクラブに入った際、同級生は 2 人しかいなかった。上級生と一緒に行う「走る練習はきつかった」が「うまくいった時は褒められ」て「楽しかった」という。彼は 2、3 年時にも外野手として試合に出ることがあった。4 年時は補欠ではあったが、9 番セカンドでほとんどの試合に出場した。「素振りをすれば打てる」という自信もつき、次第に彼にとって野球は「宝物」のごとき存在となっていった。

大震災発生時は学校にいた。試験の最中であったが、試験は中止となり皆で校庭に避難した。暫くすると、祖父母が車で兄 2 人を乗せＡさんを迎えにきた。すぐに近くのＴ山に逃げた。そこで彼は「津波で家が流されるのを見た…ショックが大きかった…1 年ぐらいは家に住めないだろう」と「不安」に駆られた。夕方には仕事に出ていた母の無事が携帯電話で確認できた。やがて母もＴ山に着き、6 人で車中泊となった。食料は町内を回っていた役場職員から配給された。父は名古屋に単身赴任していたが翌日、車で七ヶ浜町に辿り着き合流した。

その後は家族で、避難所となった小学校体育館で１ヶ月程過ごした。その間にＡさんは家族と自宅を見に行くと、Ａさんの野球用具も流失していた。Ａさんは「予想通り」であったが「がっかりした」。避難所では友人と 3 日に１回くらいはサッカーやドッジボールに興じた。知人からバットとボールをもらい、兄とトスバッティングをすることもあったが、「かなり狭い」ため「ＤＳゲームをすることが多かった…思いきり動けないのでストレスが溜まった」という。

4 月中旬になると、学校再開のために避難所は学校以外の施設に集約された。Ａさん家族も町内の某施設に移った。この頃、彼は両親から「余裕がない…送迎したり面倒みるのが難しいから野球は止めたら」といわれた。Ａさんは「家のことを考えるとそれも分かるけど悲しかった」。少し考え「大好きな野球を続けたい」と泣きながら両親に訴えた。すると両親が折れた。間もなく、大震災発生以降初となるＹクラブの活動が実現した。内陸部のスポ少から合同練習に招かれたのである。用具は団長や先輩からもらった。この際は「全員来た」こともありＡさんは「嬉しかった」が、避難所での生活の様子は一向に変わらなかった。

Ｙクラブの活動が正式に再開したのは 5 月の連休明けであった。暫くは土曜と日曜しか活動できなかったが、Ａさんは「グラウンドが使えることが何よりも嬉しい」と思った。再開後は被災して奪われた「当たり前の日常」が戻ったこと、「野球ができる」ことへの「感謝の気持ちが強くなった」という。

5 月下旬には中学校校庭の仮設住宅に移った。自宅の修繕が終わるまでの 4 ヶ月程は 3 部屋での 7 人暮らしであった。「狭かった…生活は大変」だった。「うるさくすると苦情がきた」し「周りに気を使わなきゃだめ」であった。避難所と同様にあまり遊ぶスペースもなく、キャッチボールくらいしかできなかった。そんな中でＹクラブの活動の際は「嬉しかった…思いきり動けてストレス解消になった…気持ちが楽になった」という。

6 月には例年より１ヶ月程遅れて開催された県大会にＹクラブも出場することができた。「野球ができることの喜び」を覚えた。「優勝を目指した」が 2 回戦で敗退し「悔しかった」という。Ｙクラブの活動は、夏休みが終わると火曜と木曜にも行われるようになった。秋になるとＡさんは自宅に「やっと戻れた」。自分の部屋もあり「嬉しかった」という。自宅でも父や兄と野球の練習ができるようになり「当たり前の日常」に戻った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

吉田　毅、東日本大震災で被災した総合型地域スポーツクラブのレジリエンスに関する社会学的研究―地域スポーツ論への一視角―、体育の科学、66 巻 7 号、杏林書院、2016

６．研究組織

(1)研究代表者

吉田　毅（YOSHIDA, Takeshi）
常葉大学・健康プロデュース学部・教授
研究者番号：７０２１０６９８